

令和5年度

研究紀要

【研究主題】

自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の実践
～4つの④を意識させた授業づくりを通して～



千葉市立緑町中学校

目 次

◇ はじめに	1
◇ 研究・研修の概要	2
◇ 教科の研究	
◆ 国語科	6
◆ 社会科	8
◆ 数学科	10
◆ 理科	12
◆ 音楽科	14
◆ 美術科	16
◆ 保健体育科	18
◆ 技術・家庭科	20
◆ 英語科	22
◆ 特別の教科 道徳	24
◆ 特別活動	26
◆ 総合的な学習の時間	28
◇ おわりに	30
◇ ご指導いただいた講師の方々・研究同人	31

はじめに

校長 滝口 健二

「生きる力」を育むために、学校教育を通して育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱として整理された、新学習指導要領も完全実施から3年が経過いたしました。現場の授業においては「主体的・対話的で深い学び」の実践がさらに本格化しきいているところかと思えます。また、教育活動の質を向上させ、学習の効果を最大限に引き出すために、地域・家庭と連携・協働するカリキュラム・マネジメントも各学校で工夫されているようです。学習タブレットを活用した授業展開が定着し、有効的な活用についての論議もされ始めました。

本校は令和2年度～3年度に千葉市教育委員会指定でキャリア教育について研究を推進してまいりました。新学習指導要領には、生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて充実を図ること、とされています。自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の在り方についての研究成果を生かし、令和5年度もキャリア教育を軸に、各教科等で日々の学習活動を行う実践を積み重ねてまいりました。そうした実践を通して自己の在り方、生き方についての意識の変容を目指してきましたがキャリア教育という一朝一夕には結果となって表れにくい分野だけに十分満足の得られる研究となったかどうかは検証の難しいところではございます。しかしながら学習活動や行事等を通して生徒の成長を少しばかりではありますが促進できたものと感じております。

研究内容につきましては、公開研究を終えて2年間が経ち、残された課題を一つ一つ解決していく段階ではありますが、本年度の研究の成果をひととおりとめることができましたので、ご一読していただき、忌憚のないご意見を賜うことができれば幸いです。

職員一同協力して地域や保護者に信頼される学校づくりを目指し、歩みを止めることなく、日々の研究・研修を積み重ねて参りますので、今後とも更なるご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

研究紀要



1 研究の概要

(1) 校訓（求める生徒像）

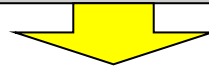
自主	寛容	錬磨
<ul style="list-style-type: none"> ・見通しをもって主体的に学習する生徒 ・自ら考え、正しく判断し、実践する生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心を持ち、相手を思いやる心優しい生徒 ・美しいもの、崇高なものに感動する感性の高い生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ・明るく健康で、体力の向上に努める生徒 ・困難に立ち向かい、自らの力で克服しようとする生徒

(2) 学校教育目標



心身ともに健康で、自主・自律の精神や豊かな創造性と実践力をもつ生徒の育成

(3) 研究主題



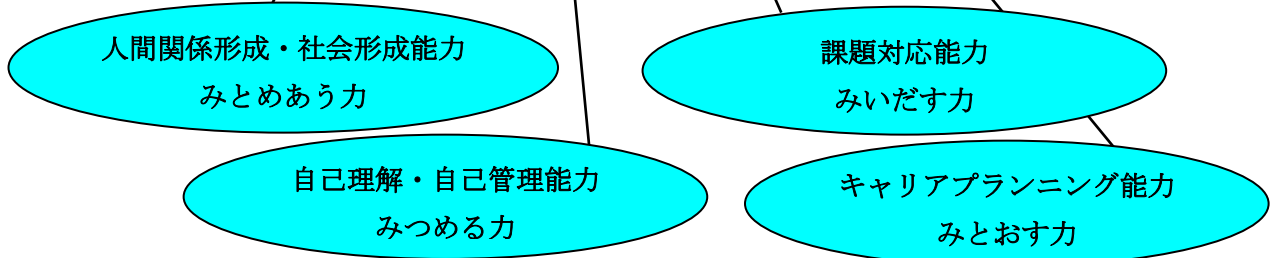
自己の在り方や生き方を主体的に考えることのできるキャリア教育の実践
 ～4つのみを意識させた授業づくりを通して～

(4) 研究の目的



各教科等の授業を通して、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を意識させた学習を行うことにより、生徒が自己の在り方や生き方を主体的に考えられるようになることを明らかにする。

【キャリア教育における基礎的・汎用的能力（緑町中「4つのみ」）】



- 教科・・・将来、社会でどのように役立つのか、学習の意義・目的をしっかりと理解させ、地道に取り組む力を育てる。
- 特別活動・・・よりよい生活や人間関係を築くための活動を通して、人間としての生き方についての自覚を深めさせる。
- 総合的な学習の時間・・・探究的な学習を通して、職業や自己の将来に関する学習活動を行う。
- 学校行事・・・ポートフォリオによって事前・事後の考えを明らかにすることで、自らの活動に対する関わり方を振り返らせる。

2 研究の内容

本研究を行うにあたり、2つの仮説を立てた。

【仮説1】

教師が各教科等の授業において、キャリア教育を通して育てる基礎的・汎用的能力を明確に捉えて指導を行い、生徒が自己の在り方や生き方を主体的に考えることができ、社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育成することができるだろう。

仮説1を解明するためには、教師が各教科でキャリア教育を通して身に付けさせたい基礎的・汎用的能力(4つの④)は何かを整理し、身に付けさせるための手立てについて各教科等部会を通して共通理解を図る必要がある。また、各教科等の授業において、その身に付けさせたい能力を生徒にも同様に示す必要がある。

本校生徒のキャリア教育における実態を把握するために、文部科学省から出された「中学校キャリア教育の手引き」を参考にし、キャリア教育における基礎的・汎用的能力(人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題解決能力、キャリアプランニング能力)に関して各3項目ずつ、計12項目の調査を行う。【資料3】それをもとに、各教科等で身に付けさせる能力を整理し、研究を進めていく。【資料1】今年度1月に再度意識調査を行い、実態を把握する。

【仮説2】

生徒が中学校におけるキャリア教育の目標を明確に捉えて各教科等の授業に取り組めば、自己の在り方や生き方を主体的に考えるようになり、各教科等の学習に意欲的に取り組むことができるだろう。

仮説2を解明するためには、生徒が各活動において目的を明確にすることが必要である。そのために、行事に関しては、特別活動・総合的な学習の時間・キャリア教育の各部会で行事を分担し、行事毎に事前と事後の取組に対しての意識の変容を見ることが出来るワークシートを作成する。【資料2】生徒は、作成した資料をもとにして、目的をもって行事に取り組むことができると考える。また、ワークシートはキャリアパスポートとして蓄積をしていく。各教科においては、教師が授業における目標を生徒に明確に伝えることを意識し、授業を行う。仮説1と同様に、意識調査を行うことで、実態を把握する。

【資料1】今年度の各教科等における研究主題と身に付けさせたい基礎的・汎用的能力

各教科等	研究主題	身に付けさせたい基礎的・汎用的能力
国語	「考えの形成」を促すための指導の工夫～思考の視覚化を通して～	自己理解・自己管理能力
社会	「社会を見通す力」の育成を目指した授業の工夫～「本気で考えたい課題」の設定を通して～	人間関係形成・社会形成能力
数学	数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動を通じた学習指導の在り方～「見直し」と「振り返り」の過程を重視した授業づくり～	課題対応能力
理科	評価規準に基づく、指導計画の作成と思考力・判断力・表現力の育成	課題対応能力
音楽	音楽の良さを感じ取り、主体的に取り組む生徒の育成～4つの基礎的・汎用的能力の向上を目指して～	人間関係形成・社会形成能力 課題対応能力
美術	多様な考えや価値を認め合い、より深く作品の良さ、美しさを感じ味わう鑑賞教育の工夫	人間関係形成・社会形成能力
保健体育	一人一人が健康の保持増進のための実践力を高める授業づくり～体育分野での課題対応能力の向上を目指して～	課題対応能力
技術・家庭	技術・家庭科におけるキャリア教育の在り方～協働活動を通じた課題対応能力の育成～	課題対応能力
外国語	自己理解・自己管理能力の向上を図る言語活動の工夫～互いに高め合う学習活動を通して～	キャリアプランニング能力

特別の教科の道徳	自己を見つめ、他人を理解し、将来を見通した道徳的実践力の育成	人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力 キャリアプランニング能力
特別活動	主体的に社会における自己の在り方を考えられる生徒の育成～「自己理解・自己管理能力」と「課題対応能力」の向上を目指して～	自己理解・自己管理能力 課題対応能力
総合的な学習の時間	自己の生き方を考えていくための探求的な学習活動の工夫～課題解決能力の向上を目指して～	課題対応能力 キャリアプランニング能力

【資料2】今年度ワークシートを作成して行う学校行事（キャリアパスポートとして蓄積する。）

<ul style="list-style-type: none"> ・合唱コンクール…合唱コンクールへ向けての思いや練習に対する取組を、事前と事後で振り返ることで、自らが学級に対してどのような立場で関わるべきかを考えさせる。 ・一学年校外学習…班別学習では探求課題について仮説を立て、校外学習を通して実証することを目的とした課題解決学習を行う。また、働いている人へのインタビューも行い、職業に対しての意識を高めさせる。 ・一学年職業学習…企業の担当者から会社の概要や働くことについての講話を聞き、キャリア教育との関連を考えさせ、将来働くために必要な力を身に付けさせる。 ・二学年職業学習…企業の担当者が、生徒に対し会社の概要や働くことについて話をし、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を意識した体験学習を通して、将来働くために必要な力を身に付けさせる。 ・立志式…自らの将来について考えた上で、自分の思いを「決意の言葉」に表す。「決意の言葉」を書き表し、学年全員の前で思いを誓わせ、互いに認め合わせる。

3 研究の成果と今後の課題

キャリア教育における基礎的・汎用的能力毎に調査を8月と3月に行った。これらの結果【資料3】から本研究の教育効果を考察した。

各能力に対して、概ね8割以上の生徒が「いつもしている」と「時々している」という肯定的な考えをもち、日頃から実践していることがわかり、12の質問項目のうち7つが向上した。

「人間関係形成・社会形成能力（みとめあう力）」についての質問1～3では、肯定的な考えをもつ生徒が平均して96%と高い結果が確認できた。

「自己理解・自己管理能力（みつめる力）」についての質問4～6の項目では、平均して85%であった。また、初めてすべての項目で上昇傾向を示した。

「キャリアプランニング能力（みとおす力）」についての質問10～12においても、肯定的な考えをもつ生徒が他の能力と比べると平均値は低いものの、平均して79%という結果となった。

以上の結果から、各教科等の授業を通して、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を意識させた学習を行うことにより、生徒が自己の在り方や生き方を主体的に考えられるようになることがわかった。その一方で、基礎的・汎用的能力（4つの $\textcircled{み}$ ）における、「キャリアプランニング能力（みとおす力）」の育成について、自分自身を見つめ直したり、その後見通しをもって考え行動したりする力が不足していることが主な課題として挙げられる。

来年度の研究では、生徒が現状の自分と向き合い、自分の強みや不足している能力を分析、把握し、将来を見据えて、自分がすべきことに自ら進んで取り組もうとする態度を育てる必要がある。そのためにも、引き続き自分の将来について明確に考え、具体的な目標と実現のための方法を考えさせる必要があるだろう。

【資料3】生徒に行った意識調査の内容と結果

質問1. 友だちや家の人の意見を聞く時、その人の考えや気持ちを受け止めようとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	64.5%	33.0%	2.4%	0.0%
3月	71.5%	27.5%	0.5%	0.5%

質問2. 相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	47.6%	45.2%	6.1%	1.2%
3月	54.2%	40.7%	4.2%	0.9%

質問3. 自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周囲と力を合わせて行動しようとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	47.9%	46.4%	5.5%	0.2%
3月	57.1%	36.4%	5.6%	0.9%

質問4. 自分の興味や関心、長所や短所などについて、把握しようとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	47.3%	40.9%	10.0%	1.8%
3月	51.9%	38.9%	7.8%	1.4%

質問5. 気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	36.4%	46.7%	13.6%	3.3%
3月	47.4%	37.9%	9.7%	5.0%

質問6. 不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	24.8%	51.2%	19.4%	4.5%
3月	26.8%	50.5%	19.4%	3.3%

質問7. 分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、誰かに質問をしたりしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	37.3%	48.5%	12.1%	2.1%
3月	48.1%	40.7%	9.8%	1.4%

質問8. 何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	47.6%	44.8%	6.4%	1.2%
3月	46.7%	47.7%	4.2%	1.4%

質問9. 何かをする時、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	50.3%	33.6%	12.1%	3.9%
3月	38.3%	47.7%	9.8%	4.2%

質問10. 学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	35.8%	51.2%	9.1%	3.9%
3月	38.8%	41.6%	16.8%	2.8%

質問11. 自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	30.3%	43.3%	19.1%	7.3%
3月	33.6%	40.7%	20.1%	5.6%

質問12. 自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしているか。

	いつもしている	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
8月	34.8%	44.2%	16.4%	4.5%
3月	37.9%	43.9%	13.6%	4.7%

国語科

1 教科研究主題

「考えの形成」を促すための指導の工夫

～思考の視覚化を通して～

2 主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から
学習指導要領では、自分の考えを形成する学習過程が重視され、全ての領域において「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられている。文章から読み取ったことを基に考えを形成するためには、読み取った情報と知識等を関連付けたり、言葉の意味を多面的・多角的に吟味したりする力が必要である。学習過程を工夫し、思考の視覚化を取り入れた学習を行えば生徒が必要な情報を正確に読み取り、根拠を明確にして自分の考えを形成する力を高めることができるのではないかと考え、研究主題を設定した。自分の思いや考えを形成し、深めることはキャリア教育における「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」の育成につながっていくと考える。

(2) 生徒の実態

令和5年度全国学力・学習状況調査における平均正答率は77%と全国平均を7%ほど上回っている。また、「国語の勉強は大切だと思いますか。」という質問に対しての肯定的な回答は91.4%であり、「国語の学習で学んだことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。」という質問に対しての肯定的な回答は87.1%であった。このように、国語の学習に対して前向きに取り組む生徒が多い。その一方で、昨年度1月の実態調査では「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う。」という項目に対して93%が難しさを感じると回答していた。文章を正確に理解することに加えて、生徒たちが自ら進んで触れることのない種類の文章でも、その内容を身近な話題として捉えられる工夫をしていく

必要がある。そして、様々な話題に触れ、それぞれに対して自らの考えをもてるような指導の工夫を行っていきたい。

3 研究の目標

(1) 学習内容を生徒が身近な話題として捉えられるように、題材等を工夫することで、生徒一人一人が学習課題に沿った自らの考えをもつことを目的とする。

(2) 文章から読み取った筆者の考えや、課題に対する自分の考えを視覚的に整理しやすくすることが生徒一人一人の考えの形成を促すことを明らかにする。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

学習内容を身近な話題として捉えられるように、必要に応じて題材に関連した補助資料を提供するなどして、学習課題に沿った自分の考えをもてるようにする。

(2) 研究の目標(2)に関して

場面や目的に応じた思考ツールや表現ツールを提示する。また、タブレットを活用し、自分の考えを広げたり深めたりできるような交流の場を設定する。

5 研究の実践

(1) 単元名

「わかりやすいスライドに作り替えよう」(第2学年)

(2) 単元について

「モアイは語る——地球の未来」(第2学年)を

教材とし、「わかりやすいスライドに作り替えよう」という単元を設定した。本単元は「意見を裏付けるための、適切な根拠の在り方について理解する」及び「自分の知識や考えと比べながら、文章の構成や論理の展開を吟味する」力を伸ばすことを目的とし、「本文の内容をわかりやすくスライドの形式にまとめなおす」という言語活動を設定した。本文をなぞったり変えたりしながら、自分なりの表現をする翻作の手法を用いることで、スライドにまとめる過程で本文を精読することにつながる。また、スライドにまとめなおすという活動は生徒たちには馴染みがあり意欲を喚起できると考えた。さらに図表を用いることも容易なため、読み取った内容を視覚的に整理し、自分自身の考えをもつことができると考え、本授業を設定した。

(3) 学習の実際

スライドにまとめるまでに、本文の範読と語句調べ、問題提起とその答えを確認する活動を行った。スライドを作り始める際には「この教科書を使っていない同級生に対して、本文をわかりやすくスライドにまとめ、最後に自分の考えを述べる」という目的を設定し、言葉遣いやまとめかたの基準を考えられるようにした。おおむね、それぞれの問いに対する答えを図表を用いてわかりやすくまとめられた。途中で、互いのスライドを班の中で共有し、読みあう活動を行った。その中で客観的にわかりやすいかどうか、まとめる際に抜けている要素はないか、考えを述べるための根拠は適切か等の確認をすることができた。最終的には、本文を何度も読み理解したことで自分の考えをもつことにつながった。

授業後の生徒の感想では、「まとめるために本文を何度も読み返すことで理解が深まった」や「矢印を使うことで、順序だててわかりやすく伝えることができた」、「読みあったことで、本文をまとめることができた。自分の意見をもつことは今まで難しかったが、今回は本文をたくさん読んだからできた」という記述がみられた。

(4) 実践のまとめ

今回の授業では、本文の内容をスライドにまと

める際にスライドを利用した。図表を用いて、説明することができたため、普段文章だけではなかなか説明すること難しい生徒も取り組むことができた。共有することも容易であるため、他者との比較やアドバイスをもらうことで客観的に捉え、改善につなげられた。このような活動で、本文を何度も読み返すことができ、本文の内容の理解にもつながり、自分の考えを持てるようになった生徒が多かった。

6 研究のまとめ

(1) 成果

「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う。」という項目に対して、難しさを感じるとの回答が昨年度1月の82.3%から、今年度1月の調査では81.6%にわずかながら減少した。生徒にとって身近な話題を扱ったり、より関心をもちやすい課題を設定したりすることで、課題に沿った自らの考えを形成しようとする姿勢を引き出すことがある程度はできたと考えられる。さらに、今年度1月の調査では「国語の学習では、単元ごとに自分の考えをもつことができた。」という質問に対して82.1%の生徒が肯定的な回答をしている。検証授業後の振り返りでは、「様々な意見をもらい、自分自身の考えを深めたり広げたりすることができるとわかった」「他の人と意見交流をする際に、自分の考えをしっかりと述べることで自信をもてた」など、自分自身が考えをもつことに前向きな記述が多く見られた。考えの形成を意識した学習課題や言語活動を継続して設定したことにより、生徒自身も「自分の考えをもつ」ことを意識して学習に取り組むことができたと考える。

(2) 課題

考えの形成を促すために目的意識をもたせた授業や様々なツールを活用したことはある程度の効果があったと考えられる。今後は考えをもつだけではなく、その考えを他者に伝えるという段階まで意識した授業づくりをしていきたい。

社会科

1 教科研究主題

「社会を見通す力」の育成を目指した授業の工夫
～「本気で考えたいくなる課題」の設定を通して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

全体研究主題（キャリア教育）との関連から中学校社会科では、グローバル化する国際社会に主体的にかかわる資質・能力を育成することを目標としている。日本では2009年に裁判員制度が始まり、2015年には選挙権の年齢が18歳に引き下げられた。2020年には改正民法の施行により成人年齢が引き下げられ、生徒たちは、将来そう遠くないうちに社会参加する機会がやってくる。

そのような今日の社会において、今後の日本を担う子どもたちには、「社会的な見方・考え方を働かせることで、変化の激しい現代の社会を見通す力」が求められる。社会参加に向けて、主体的に自己の在り方や生き方を考えることが重要であり、コミュニケーション能力や思考力などの、基礎的な資質・能力を育成することが必要不可欠である。以上のことから、本校社会科では、「獲得した知識を活用する場面」＝生徒が「本気で考えたいくなる課題」を設定し、生徒の思考力を育成することに重点を置いた。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は与えられた課題に意欲的に取り組み、知識も豊富である。授業内の発表では、知識を問う質問には積極的に答えるが、理由や原因を問う質問には消極的になる様子も見られる。しかし、話し合い活動では活発に議論が行われ、深まりのある授業展開が可能である。

また、昨年度の1月に実施した実態調査から、「自分の意見や考えを人に伝えることが得意だ」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が20%、「自分にも社会（世の中）のためにできることがあると思う」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が52%であった。世の中のために何かができると考えつつも、自分の意思を表明することを苦

手とする生徒が多いことが伺えた。

3 研究の目標

- (1) 「今」を出発点とする発問・題材から、生徒にとって身近な「問い」（＝生徒が「本気で考えたいくなる課題」）を設定することで、生徒が主体的に世の中での出来事に関わろうとする公民的資質が養われることを明らかにする。
- (2) 生徒の「本気で考えたいくなる課題」の追究を通して、社会的事象を多面的・多角的に思考する力（＝社会を見通す力）の育成を図る。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

社会科の学習内容を、単なる「過去に起きたこと」「遠い場所のこと」「自分には関係ないこと」とは捉えさせないために、生徒にとって身近で実体験を伴うような話題・教材から授業を展開する。授業の導入部では、学習内容に関連したクイズやゲーム、動画、実物教材など、「今」を出発点とする発問・題材から、生徒の疑問（＝なぜ？）を引き出すことで、生徒が「本気で考えたいくなる課題」を設定する。

(2) 研究の目標(2)に関して

世の中での出来事に関心をもたせ、主体的に関わろうとする態度や、社会事象を多面的・多角的に思考する力を養うために、話し合いや意見の共有などの対話的な学習や、具体的な場面設定を通して獲得した知識・技能を活用するパフォーマンス学習を展開する。また、ICTを活用した単元の振り返り学習を行い、授業ごとのまとめや単元を貫く課題に対する考えなど、「自分はどうか考えるのか」を記入する機会を積極的に設定していく。

5 研究の実践

- (1) 題材名「なぜ解きどき、天保の改革」

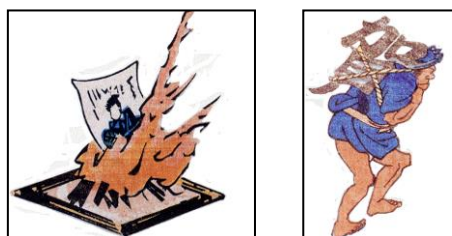
(2) 単元・題材について

本単元は、中学校学習指導要領社会の歴史的分野の内容「(4) 近世の日本」のエについて、百姓一揆などに結びつく農村の変化や商業の発展などへの対応という観点から代表的な事例として徳川吉宗、田沼意次、松平定信、水野忠邦の政治改革を取り上げる。その中で、幕府の財政の悪化に着目し、幕府の政治が次第に行き詰まりを見せたことを理解させることをねらいとする。

本実践では、水野忠邦の政治改革とその時代背景について、当時人々の間で人気を得た「判じ絵」の普及を出発点として考察する授業を展開した。「判じ絵」とは、江戸時代に流行した視覚と頭脳で楽しむ絵の謎解き遊びである。本実践の目的は、「判じ絵」が流行した理由を、外国船の接近や天保の改革などの時代背景を踏まえて考察し、表現することである。

(3) 学習の実際

授業の導入部では、現在の謎解きクイズを確認後、次は江戸時代の謎解きクイズを解いてみようとする指示を出し、5つの「判じ絵」がそれぞれ何を表しているかを考えさせた。



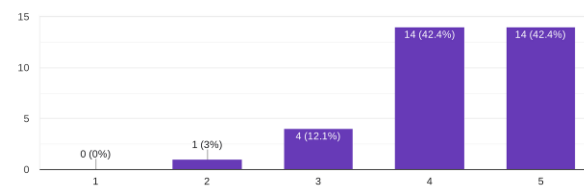
【資料1】授業で扱った判じ絵（一部）

（左の解答：えび、右の解答：しょうが）

展開部では、江戸時代の年表を用いて「判じ絵が描かれるようになったのは年表中のどの出来事がきっかけだったのか」を、協同的な学びを通して考察した。一見ただの謎解きの娯楽でしかない「判じ絵」も、それが普及した理由を考えることで、当時の「外交」や「財政」、「文化」、「人々の様子」など、様々な時代背景に迫ることができる。授業の終末部では、学んだことを通して「なぜ判じ絵が流行したのか？」という課題に対して生徒が自らの考えを表現する機会を設定した。

(4) 実践のまとめ

今回の授業は印象に残りましたか？
33件の回答



【資料2】授業後の振り返りシート（一部）

授業後の振り返りシート（資料2）から、今回の授業が印象に残ったと回答した生徒は84.8%であり、生徒が「本気で考えたい課題」の設定として概ね達成することができたと考えられる。また、生徒の振り返りの記述では、「老中水野忠邦による天保の改革で倭約令が出され、贅沢が禁止されたため、そのかわりの娯楽として判じ絵が流行した。」など、学習課題に対して生徒自ら歴史背景を多面的・多角的に捉え思考しようとする姿が見られた。

6 研究のまとめ

(1) 成果

1月に実施した実態調査では、「自分の意見や考えを人に伝えることが得意だ」の項目に「あてはまる」と回答した生徒が20%（2%増）、「自分にも社会（世の中）のためにできることがあると思う」の項目が52%（2%増）と、5月の実態調査と比べてわずかに上昇した。このことから、社会参加に向けた意識・技能が上昇したと言える。

(2) 課題

本校での研究実践や実態調査を踏まえて、本校生徒は「獲得した知識・技能の活用」や、「自分の意見をもち発信する」ことなどに対して苦手傾向あることが改めて明らかとなった。次年度ではこの点に重点を置き研究を進めていきたい。

さらに、次年度においては、生徒がどのような条件下で「本気で考えたい課題」と成りえるのか、より具体的なアンケート調査を行うことで、生徒の主体性を高める授業実践の工夫を行いたい。また、今年度行った実態調査ではどの項目も微増に留まったため、生徒が自分の活動や意見に対して自信をもてるような授業展開を心がけていく。

数学科

1 教科研究主題

数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動を通じた学習指導の在り方

— 「見通し」と「振り返り」の過程を重視した授業づくり —

2 主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から『中学校キャリア教育の手引き』によると、課題対応能力とは、以下のように示されている。

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。この能力は、自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。～中略～社会の情報化に伴い、情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

つまり、学習計画（見通し）を自ら立て、数学的な活動を通して、学習計画を見直し（振り返り）ながら、情報を理解・選択・処理する中で、数学的な見方・考え方を働かせられれば、課題対応能力の育成に繋がることがわかる。

(2) 生徒の実態

「計画を立てたり、見通しをもったりして勉強に取り組むほうだ」という質問に対する肯定的な回答は46%であった。また、「自分なりに工夫して、勉強の計画を立てるようにしている」という質問に対する肯定的な回答は57%であった。これらの回答から、計画を立てる機会があるのは、テスト計画を立てる程度であり、多くの生徒が計画を立案し学習していないことがわかる。そのため、単元ごとに自分の学習目標と目標達成のために取り組むことを考えさせ「単元の終わりに目標が達成できたのか、自分の取組がどうだったか」を振り返るようにさせたい。

3 研究の目標

(1) 単元ごとに振り返りシートを用いて、自分の目標設定と取り組み方（見通し）と目標が達成できたか（振り返り）を行う。

(2) 目標を明確にし、「見通し」「振り返り」の過程を重視するとともに自己の考えを広げ深める対話的な学びの充実を図る。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

先に述べたように、計画を立てたり、見通しをもったりして勉強に取り組む生徒や自分なりに工夫して、勉強の計画を立てるようにしている生徒は半数程度だったため、単元ごとに振り返りシートを書かせることで計画を立てたり、見通しをもったりして勉強に取り組む生徒や自分なりに工夫して、勉強の計画を立てるようにしている生徒が増えていくと考えた。また、振り返りシートも教科担当が内容を確認し必要であれば助言することで勉強の取り組み方を改善できると考えた。

(2) 研究の目標(2)に関して

「見通し」や「振り返り」の過程を重視するために振り返りシートだけでなく、授業内でも「見通し」や「振り返り」の過程を重視しようと考えた。授業内では、問題に取り組む際、既習事項等を用いて「見通し」をもって考えることや「振り返り」を行うことで自らの学びを調整できるようにしていきたい。また、自己の考えを広げ深めるためにも対話的な学びを取り入れていきたい。

5 研究の実践

(1) 単元名「図形と相似」

(2) 単元について

小学校算数科の第6学年では、図形についての観察や構成などの活動、拡大図や縮図の学習を通して、図形の拡大や縮小（二つの図形の形が相似であること）について理解してきている。また、中学校第2学年では、数学的な推論の過程に着目し、三角形や平行四辺形の基本的な性質を三角形の合同条件を用いて論理的に確かめ説明することを学習している。本単元では、これらの学習の上に立って、三角形や多角形などについて形が同じであることの意味をより明確にすることになる。三角形の相似条件などを用いて図形の性質を論理的に確かめ、数学的に推論することの必要性和意味及び方法の理解を深め、論理的に考察し表現する能力を伸ばすことを主なねらいとする。

(3) 学習の実際

図形と相似の単元の学習は、合計18時間で実施した。初めは振り返りシートの単元の目標と学習の取り組み方を記入し、相似の定義や三角形の相似条件など知識及び技能の内容を学習した。その後の三角形の相似条件と証明では、根拠を明らかにしながら筋道立てて証明を書いていく学習を行った。主に「見通し」や「振り返り」の過程を重視したのは、三角形の相似を証明する内容である。証明の問題に対して、平行線の性質など既習事項を用いて見通しをもって考え証明をした。また、その際に自分の近くの人とも一緒に話し合いながら取り組ませる活動など、自己の考えを広げ深める対話的な学びを取り入れた。授業の最後には、どのようにして問題を解決したのか発表させ、考え方を全員で確認し、自身の考え方について振り返りを行った。単元の最後には、振り返りシートで目標が達成できたかと学習の取り組み方がどうだったかを記入し単元の振り返りを行った。

(4) 実践のまとめ

単元ごとの振り返りシートについて、始めた当初は明確に目標や取り組み方を記入することができず、振り返りも具体的に書くことができなかった生徒が多くいた。しかし、教科担当が確認し助言を行うことで、明確に目標や取り組みを記入することができ、それに伴って振り返りも具体的に書くことができる生徒が増えたように感じた。

目標を明確にし、「見通し」「振り返り」の過程を重視するとともに自己の考えを広げ深める対話的な学びの充実を図ることについて、既習事項等を用いて「見通し」をもって考えることができていた。また、他者との対話を行うことで自分では気付かなかった考え方や解き方を知ることができた生徒がいた。

6 研究のまとめ

(1) 成果

実施したアンケートでは、「振り返りシートでは明確に目標や学習の取り組みを記入することができましたか」という質問に対し、肯定的な回答は75%であった。また、「問題を解く際、友達と話し合いをして解くことで自分では気付かなかった考え方や解き方を知ることができましたか」という質問に対し、肯定的な回答は80%であった。このことから「見通し」をもって学習に取り組み、「振り返り」を行うことで学習の取り組み等の改善ができたのだと思う。また、話し合いを行うことで自己の考えを広げ深めることもできたと思う。

(2) 課題

実施したアンケートでは、「既習事項を用いて問題を解くことができましたか」という質問に対し、否定的な回答は30%であった。その理由の多くは、既習事項がしっかりと定着していなかったことであった。そのため、今後は既習事項の定着を図ることが課題だと考えている。また、話し合いの際数学的な表現を用いて話すことができていない生徒もいたため、数学的な表現を用いて話し合いをできるようにさせていきたい。

理科

1 教科研究主題

評価規準に基づく、指導計画の作成と思考力・判断力・表現力等の育成

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連

理科の目標は、「見通しをもって観察、実験を行うことを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を育成すること」である。これらの資質・能力を育むために、重視すべき学習の過程は、大きく3つに分かれる。

はじめに、課題を把握する過程である。この過程は自然現象をみつめる力の育成を目指している。次に、課題を探究する過程である。この過程では、仮説を検証するための見通す力の育成を目指している。最後に、課題を解決する過程である。新たな規則性や性質を見いだす力の育成を目指している。

これらの学習過程は、論理的な思考力・判断力・表現力等によって深まる。よって論理的な思考力・判断力・表現力等を身につけることは、キャリア教育の4つの基礎的・汎用的能力の向上につながる。

(2) 生徒の実態

本校の理科教育の課題を見いだすために、キャリア教育に関する質問紙調査を行い、生徒の実態を分析した。

その結果、「理科の学習は好きか？」の質問に対し、肯定的な回答は81.8%であった。その一方で、「理科の学習は生活に役立っているか？」の質問に対し、肯定的な回答は71.8%であった。

このことから、本校の理科教育の課題は、生徒が日常生活における理科の学習に有用性を感じていないことであると見いだした。その原因は、自然の事物・現象に関する実体験の不足や既習事項の活用にあると考えている。

そこで、本校では、日常生活に関わる課題を

設定し、その課題の評価規準を達成できるように、単元を構成することで、思考力・判断力・表現力等を高めていく。身近な事物現象について、既習事項を根拠に予想を立案して観察、実験を行い、その結果をもとに、日常生活に関わる課題を説明させる授業を展開することで、科学の手法を用いて問題を解決する力が身に付き、理科を学ぶことの意義や有用性を実感できると考えた。また、観察、実験については、2人1実験で取り組ませることで、自然の事物・現象に関する実体験の不足を解決する。

3 研究の目標

- (1) 身近な事物・現象に関わる課題設定を行い、生徒の関心を高め、思考力・判断力・表現力等を育成する。

4 研究内容

- (1) 研究の目標に関して
 - ① 身近な事物・現象に関わる課題の検討及び教材の研究
 - ② 生徒の既習事項や実態を把握するための質問紙調査の実施
 - ③ 授業の実践
 - ④ 生徒のノートの記録を分析

5 研究の実践

- (1) 単元名 「水溶液とイオン」

- (2) 単元について

これまでに生徒は、小学校では、水溶液の性質について学習している。その中で、水溶液には酸性・中性・アルカリ性があること、気体が溶けている水溶液があること、水溶液が金属を変化させるようすなどを学習している。中学校1年生では、身のまわりの物質について学習している。その中で、身のまわりにはいろいろな物質があり、有機物と無機物、金属と非金属に

分けられること、物質によって固有の密度があることなどを学習している。また、いろいろな気体の性質についても学習している。さらに物質の状態が変化することや物質が水に溶けるようすに関連させ、物質は小さな粒子でできていることも学習している。2年生では、化学変化と原子・分子について学習している。その中で、物質は加熱や電気によって化学変化が起こること、化学変化では状態変化と異なり、物質そのものが変化することを学習している。また、物質が原子や分子でできていること、元素記号、化学式、化学反応式を使って、元素や物質、化学変化を式で表せることを学習している。また、化学変化と熱の出入り、化学変化と質量の関係などを学習している。また、電流とその利用についても学習している。その中で、電流が流れるには回路ができていて、電磁誘導によって電流が得られること、電流の正体が電子の流れであることなどを学習している。

この単元は、これまでに学習してきたことを理解した上で取り組む内容が多い。そのためどのくらい生徒たちの知識が定着しているか確かめながら進めていく必要がある。1章の「水溶液とイオン」では、既習事項を活用し、水溶液には電流が流れるものと流れないものがあることを学習する。この違いを理解するために電気分解の実験を行い、イオンの存在を知り、原子・イオンの構造にも触れていく。そして、化学電池の実験を行い、電池の仕組みを理解し、化学変化が普段の日常生活に利用されていることにも気付かせ、学習の関心や理科を学ぶ有用性を高めていきたい。

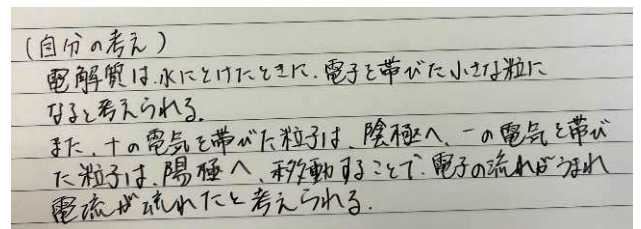
(3) 学習の実際

本授業は、「水溶液とイオン」の単元の中で、塩化銅水溶液に電流を流した時の変化からイオンの存在を見いだす学習内容を取り扱ったものである。4人班を2組に分け、話し役と聞き役に分けて3分間でローテーションする対話活動を行った。

他班の考えや意見を聞くなど、実験結果をもとに対話活動を行い、知識を活用させながら考察し、水溶液とイオンに関する理解を深めた。

(4) 実践のまとめ

本実践後に生徒の記述を回収し、分析した。その結果、以下のように、観察した現象について既習事項や生活体験をもとに自分の考えを深め、表現している様子がわかる。



【 図 生徒の記述 】

その一方で、粒子モデルの図などを活用している記述が少なかったことから、粒子モデルなどを活用し、身近な現象を可視化することで、イオンの概念が定着するのではないかと考えられる。

6 研究のまとめ

研究の成果と課題を明らかにするために、理科の学習及びキャリア教育に関する質問紙調査を5月と1月に行った。

(1) 成果

5月の結果では、「理科の学習が生活に役立っているか？」に対する肯定的な意見が71.8%であったが、1月の質問紙調査では、質問に対する肯定的な意見が81.5%に上昇した。

このことから、身近な事物・現象に関わる課題を設定し、それらに対する自分の考えを記述させることで、生徒の理科の学習の有用感が高まったと考えられる。

(2) 課題

1月の質問紙調査において、「自分の考えを表現することが難しいと感じるか？」の質問に対して、難しかったと考える生徒が28.6%であった。このことから、本研究の課題は、自分の考えを表現できない生徒への支援であると考えられる。これについては、モデル図や思考ツールの活用などを取り入れ解決していきたい。

音楽科

1 教科研究主題

音楽の良さを感じ取り、主体的に取り組む生徒の育成
～4つの基礎的・汎用的能力の向上を目指して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

学習指導要領の音楽科の目標は「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」とされている。それは、音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることにより、その後の人生においても生きて働くものとなるとの考えからである。そこで、音楽学習に欠かせない他者と協力して取り組む「みとめあう力（人間関係形成・社会形成能力）」だけでなく、学習目標を理解し目標に近づくように努力する「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」、課題にどのように取り組み、振り返りを通して改善していく「みいだす力（課題対応能力）」、到達目標を提示し練習計画を立てる「みとおす力（キャリアプランニング能力）」の4つを高めていこうと考えた。

(2) 生徒の実態

6月に行った事前調査では、「今、学んでいる内容は、あなたの生活を助ける力の一部になると思うか。」という質問で、85%の生徒が肯定的な回答をした。どんな助けになるかという選択肢をつけたアンケート（複数回答可）では、「趣味で音楽を楽しむときの基礎技術 81.9%」「曲を選ぶ時の基礎知識 51%」「曲を鑑賞するときのポイントがわかる 49%」の3項目が上位を占めた。何の役にも立たないと答えた生徒は2.5%であった。

このことから、多くの生徒が音楽の知識や技能を習得するための学習が「音楽に対する感性」を働かせることにつながり、将来を通して音楽を愛好していく基盤となると考えていることがわかった。

3 研究の目標

- (1) 協働の音楽学習で主体的に取り組む生徒を育成する。
- (2) 自ら目標をもち、練習計画を立てることで見通す力を高める。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

合唱や器楽学習で、一つの音楽を演奏する活動において、表現したいイメージを伝え合ったり、協働する喜びを感じたりする場面を意図的に設けることで、生徒が主体的に取り組むことを検証する。

(2) 研究の目標(2)に関して

器楽学習で一つの曲を演奏する活動で到達目標と学習時間を提示し、自ら練習計画を立てて実践することで、キャリアプランニング能力を高めることを検証する。

5 研究の実践

(1) 題材名「ギターに親しもう」

(2) 題材について

ギターは、様々な音楽場面で演奏される機会が多く、弦楽器の中でも生徒にとって身近な楽器の一つである。生徒にとって、ギターは基本的な奏法を習得した後に、独力で技能を発展的に伸ばしていくことが比較的容易なところに魅力がある。本校では、器楽分野においてクラシックギターの学習を3年間を通じて計画的・継続的に取り組んでいる。1学年では、ギターについての基本的な事項を学習し、特にギターの音色や響きと奏法との関わりを理解し、それらを生かして演奏する。

2学年では、前年の学習を生かし他者と協力してグループで1曲を演奏する。3学年は、今までの学習を生かし、ギターの音色や響きと奏法との関りを生かした創意工夫をしてペアでアンサンブル演奏をする。1学年の教材である「カエルの歌」は、順次進行が中心の旋律なので、音階の演奏の仕方を学習した後の楽曲として適している。また、様々なバリエーションの輪唱で演奏することができ、生徒が楽しんで合奏することができる。「きらきら星」は、順次進行と跳躍進行のある旋律であり、途中の同じ音形の繰り返し部分を創意工夫を生かした表現で、変化を感じさせる演奏ができる。2学年の教材である「カントリーロード」は、生徒も耳なじみの曲であるためグループで楽しみながら演奏できる。3学年の教材である「聖者の行進」は、主旋律と伴奏を分担できるためペアで演奏を楽しめる。このようにどの学年も主体的・協働的な学習が展開できる。

(3) 学習の実際

本題材は4時間で実施した。1時間目では、まず曲を演奏するために必要な「基本的な音階と奏法」を全体で練習した。この段階では、新しいものを学習することの喜びや楽しみを感じた生徒が多かった。時間をもて余すこともなく積極的に取り組む様子が見られた。次に、この学習の到達目標と学習時間を提示し、自ら練習計画を立てて実践した。見通しをもって練習計画を立てられる生徒が多い中、どうしたらよいのか分からず手の止まる生徒も数名みられた。そのような生徒に対して、最後が曲の出来上がりになるので、そこから逆算して1時間でどこまで進めたらよいかを考えることをアドバイスすると、スムーズに立てられるようになった。練習では、一定のテンポを保つためにメトロノームをスピーカーから随時流すようにした。なかなか進度が上がらない生徒も見られたが、近くの生徒同士で声を掛け合って確かめたり、一緒に弾いたりする様子が見られた。また、グループでテンポに合わせて弾き、旋律やリズムを確かめる姿も見られた。

(4) 実践のまとめ

今回の実践は、ギターを演奏する学習を通して、基礎的な奏法に主体的に取り組み、音色や旋律を知覚してギターの特徴を捉えた音楽表現を工夫することと、その練習過程を自らが計画することが目標であった。授業後に、「グループで合わせて、ピタッと終わると気持ちがいい。」や「皆でタイミングを合わせて演奏するのが楽しかった。」、「間違えるとグループでできないので、練習の気が抜けない。」、「見通しをもって練習したから演奏できるようになった」などの声があった。このことから、おおむね目標は達成できたといえる。

6 研究のまとめ

(1) 成果

1月に行った調査では、「今、学んでいる内容は、あなたの生活を助ける力の一部になると思うか。」という質問で、97%の生徒が肯定的な回答をした。6月と比較すると、8%増加している。どんな助けになるかという選択肢をつけたアンケート（複数回答可）では、「趣味で音楽を楽しむときの基礎技術 79%」「曲を選ぶ時の基礎知識 48%」「曲を鑑賞するときのポイントがわかる 43%」と6月より下がったものの、「社会で通用する音楽の一般常識 49%」が6月の40%より9%増加し、上位に入ってきた。これらのことから、授業での学習が意識を高めたといえる。

(2) 課題

今回の研究は、4つの基礎的・汎用的能力の向上を目指すものであったが、みとめあう力（人間関係形成・社会形成能力）「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」「みとおす力（キャリアプランニング能力）」について、向上させることができた。しかし、音楽的な表現をするところまで深められなかったため、「課題対応能力」を高めるまでに至らなかった。来年度は、4つの向上を継続し、音楽的な部分を深められるようにしていきたい。

美術科

1 教科研究主題

多様な考えや価値を認めあい、より深く作品の良さ、美しさを感じ味わう鑑賞教育の工夫
～人間関係形・社会形成能力の向上を目指して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

キャリア教育を通して育てる基礎的・汎用的能力の一つである「人間関係形成・社会形成能力」とは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手を思いやり尊重して意見を聞き、自分の考えを正確に伝えることができる能力である。美術では感じ取った作品の良さや美しさなどの価値について、根拠を明らかにして自分の考えを述べたり、互いに批評したりして自分の気付かなかった作品の良さを発見することである。これは緑町中学校の「4つの(み)の中のみとめあう力」にあたりと考えた。

(2) 生徒の実態

4月に行ったアンケート調査では、「相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしている」という質問に対して、98.6%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、「いつもしている」は50.3%であった。また、「作品を鑑賞するとき、友達の見聞を聞き、自分一人では気付かなかった価値に気付くことができる」という質問に対して、95%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答している。「いつもしている」は55.6%であった。多くの生徒が鑑賞の際に話し合い活動を通して友達の見聞をよく聞き、自分と違う価値観に気付き、自分の見方や感じ方の幅を広げていることがわかる。

3 研究の目標

(1) 「読めない名札を鑑賞する」という授業を通して、自分の名前の文字を使い、それらを点や線、面で表現することにより、新たなデザインが生まれ、面白い表現となることに気付かせる。

そして、配置の段階、線の段階、色の段階に分けて鑑賞し、それぞれの良さを見つけ、それを自分の言葉で相手に伝えることを目標とする。

(2) 話し合い活動を通して、自分と違う価値に気付く、いろいろな考え方や感じ方を受け入れる力を育てることを目標とする。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

自分の名前という身近な素材を使い、6cm×8cmという小さい枠の中にデザインすることは、誰でも取り組みやすい題材である。線の太さや線の形、色の塗り方にヒントを与えることで、デザインの工夫の幅も広がり、自らアイデアを出し、独自のデザインを作っていくことができる。

そして互いの作品を鑑賞する中で、一人一人の工夫した作品を見て、自分では考えつかないアイデアを見つけることも多々あり、個々の作品の工夫を感じ取ることができる。

(2) 研究の目標(2)に関して

鑑賞学習では、まず自分で作品を鑑賞し、発見したことや感じたことを整理してまとめる。その後、班の中で互いに発表し合うことで新たな考えや感じ方を知る。更に班でまとめたものを全体の前で発表することにより、また違う価値観に気付くことができる。最後は個人に戻り、様々な価値観を自分の中に取り入れる。より深い話し合い活動を行うことで、「人間関係形成・社会形成能力」の向上を図りたい。

5 研究の実践

(1) 単元名 読めない名札を鑑賞する

(2) 単元について

デザインの学習において、「より洗練されたデザインをするためにどのようなことに気を付けたらよいか」ということを短時間で学ぶために、6cm×8cmの紙の中に、自分の名前を使った作品を作る授業を行った。条件は苗字か名前のいずれかを漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットの中

から選んで紙面上に表す。その線をサインペンでなぞり、太さを変えたり、波線にしたりと工夫する。その後、線によって区切られた空間に着彩をして完成さる。この作品は制作している間にどんどん形が変化していき、自分でも思いもよらない形になったり、いつもと違うイメージを生み出したりする。そして出来上がった作品を互いに鑑賞しあうことにより、普段自分では気付かない多くの新しいデザインに出会うことができる。

(3) 学習の実際

いつもは一つの題材に 10 時間以上かけて制作しているが、1 回の授業で制作するとあって、生徒たちの取り組む意欲がいつもより高いと感じた。名前を使うことや、サインペンと色鉛筆を使用するということから、わかりやすく取り組みやすいと感じたようである。アイデアを出すとき、線を描くとき、色を塗るとき、それぞれにヒントを与え、他の生徒の作品を鑑賞させながら行ったため、制作する手が止まってしまう生徒もなく、全員が意欲的に制作を進めることができた。また、鑑賞の授業の際に、制作した作品について、自分がどの段階で一番良いアイデア思いついたのかを発表させることによって、他の人と共感したり、より深くいろいろな角度から自分の作品について考えたりすることができた。



<読めない名札を作る>

<良いところを
伝え合う>



(4) 実践のまとめ

今回の実践は、身近で取り組みやすい題材を考えることによって、生徒の意欲を引き出すことができ、たくさんの良いアイデアを生み出すことができた。それは生徒の制作に対する自信につながり、意欲へとつながっていくと思われる。また、それらの作品を鑑賞することにより、他の人の豊かな発想やアイデアを感じ、それらを取り入れ、今後の自分の作品に生かしていけるのではないかと考える。

6 研究のまとめ

(1) 成果

授業後のアンケート調査では、「相手が理解しやすいよう工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしている」の質問に対して、96.5%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、4月より2.1%下降しているが、「いつもしている」は58.6%で8.3%上昇している。また、「作品の鑑賞をするとき、友達の意見を聞き、自分一人では気付かなかった価値に気付くことができる」の質問に対して、96.5%の生徒が「いつもしている、時々している」と回答し、1.5%上昇していて、「いつもしている」は74.1%で18.5%上昇している。

(2) 課題

3年間を通して、鑑賞学習を計画的に行っている。鑑賞学習は美術の学習の中で、将来一番生活の中に取り入れていきやすいものなので、力を入れていきたい。特別に鑑賞の授業を行うのではなく、制作の中に工夫して鑑賞学習を取り入れていくことが今後の課題である。また、地域や身近なものからの鑑賞にも今まで以上に力を入れていきたい。

保健体育科

1 教科研究主題

一人一人が健康の保持増進のための実践力を高める授業づくり
～体育分野での課題対応能力の向上を目指して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

「生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにする」ことを究極の目標にするキャリア教育の中の保健体育科において、キャリア教育と密接に関わる指導内容が体育分野・保健分野で多くある。また、保健体育科を通して育成する健康の保持増進のための実践力や体力は、一人一人のキャリア形成の基盤としても極めて重要である。

保健体育の学習を通して、「基礎的・汎用的能力」の育成に関連する4つの分野の指導をしていく必要がある。今年度は、これらの中から「課題対応能力」に重点を置くことで、保健体育を通したキャリア教育実践の育成の部分にあたる考える。

(2) 生徒の実態

日々の授業では、一人一人が課題に対して向き合おうとする姿勢は見られる。しかし、授業に関する質問紙調査では、「自分の課題に応じてポイントを見つけることができているか。」の項目で「あまりできていない、できていない」と回答した生徒が16%いた。このことから、課題に向き合おうとする意識が低い生徒がいることがわかった。今年度は、そのような生徒への声掛けなど支援をしていかなければならないと感じる。

スポーツは、「する・みる・ささえる」ことで一人一人がその価値を知ることができるものである。各競技のゲームに参加するだけでなく、多角的にスポーツと関わる場面を作っていきたい。そこから、個人の課題やチームの課題等を発見することもできるので苦手意識のある生徒も積極的に参加できる場面を作る必要がある。

3 研究の目標

- (1) 話し合い活動ができる場と試合を外から見れる環境を作ることで、一人一人が課題解決へ向かう姿勢を身に付けさせる。
- (2) グループ練習やペア活動などのコミュニケーション活動を取り入れることで、苦手意識をもつ生徒も、積極的に個人の課題に応じた取組ができるようにさせる。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

話し合い活動に関しては、運動・スポーツを得意とする生徒と苦手な生徒と一緒に話し合い活動を行う機会を教師が意図的に作る。また、試合に参加するだけでなく、審判等を行わせることで個人、チームとしての動き方等の課題解決へ向かう姿勢が身に付くと考える

(2) 研究の目標(2)に関して

意図的にコミュニケーションをとる時間を設けたり課題解決に向けたグループ練習やペア練習を取り入れたりと、生徒の意欲向上につながる機会をつくらせる。

5 研究の実践

(1) 単元名「 バレーボール 」

(2) 単元について

ネットをはさんで向かいあい、ボールを打ち合って一定の得点に早く到達することを競うネット型の球技である。ネット種目は相手に邪魔されずにプレーすることができる。正確なボール操作の技能と位置どりの判断や役割に応じた行動が重要である。1チーム6人（授業内では5人でも行った）編成になっており、チームで3回までボールに触れられる。チームで連携をとり、集団対集団での攻防を繰り返すスポーツである。

(3) 学習の実際

1年生男子ではバレーボールを初めて行う生徒も多く始めはつなぐ意識よりも、ボールを上にあげることだけで精一杯の生徒が多くいた。

しかし、1年生はバレーボール部員が多く、基礎練習でのペア活動をしていくなかでアドバイスをもらい上達していく生徒が増えていくのが記録として出ていた。

3年生男子では、試合をしているときに審判の役割をしている生徒がチームでの動きにアドバイスする姿や、連携の取れているチームの動きを自チームで参考にしてしていると学習カードに記載する生徒いた。

(4) 実践のまとめ

体育分野で話し合い活動を取り入れることで、生徒一人一人が個人やチームの課題に気づき、解決しようとする姿が見られた。運動が苦手な生徒も得意な生徒からアドバイスをもらい、各種目に取り組む姿も見られた。「課題を解決するためのポイントを積極的に行えていますか」というアンケートでも88%が肯定的な回答をした。生徒同士で課題と向き合うことで、授業の内容がより深く学べる実践になった。

6 研究のまとめ

(1) 成果

令和6年1月に行った調査では、「自分の課題に応じてポイントを見つけることができますか」という項目に対して、5月に行ったときと比べ、8%増加した。また、「仲間に対してアドバイスや支援を積極的に行えていますか」という項目では、5%増加した。これらのことから、試合間や審判を行うなかで、仲間と話し合い活動を取り入れることで、個人の課題に気付く生徒が増えた。

また、仲間からももらった意見や自分で気付いた課題に対しては、改善すべきポイントに向き合おうとする生徒が増えた。

(2) 課題

一人一人が課題に対して向き合おうとする姿勢は見られたが、「自分の課題に応じてポイントを見つけることができますか。」の項目で「あまりできていない、できていない」と回答した生徒が16%いた。実践を行った体育分野では課題に対して向き合うことができる生徒が多い反面、保健分野になるとどうしても体を動かすことが好きな生徒は、課題に向き合おうとする姿勢が体育分野とは違っていた生徒もいた。

今後は、保健分野でも研究実践の機会を設けていきたい。保健分野は、「自分事」として捉えることが難しい部分も多くある。そこで、いかに興味を引きつけ、「自分事」として授業に臨めるかを考える授業実践をしていきたい。保健の学習をするなかで、健康の保持増進を考えていける課題対応能力をつけさせたい。

来年度も継続して「課題対応能力」を保健体育科として、どのように身に付けていくことができるかを研究していきたい。

技術・家庭科

1 教科研究主題

技術・家庭科におけるキャリア教育の在り方

～対話的活動の気づきを生かした課題解決能力の育成～

2 主題について

(1) 全体研究主題（キャリア教育）との関連から技術・家庭科部会では、キャリア教育と教科との結びつきを考えたところ、他者との協働活動を通して、多様な考え方に気づき、生活を豊かにする生徒の育成が図れると考えた。今年度は、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の1つにある課題対応能力の様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力を育むことを目標とした。昨年度は、社会や家庭の中で、他者の考えや立場を理解し、他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成しようとする能力の育成について研究した。協働活動の中で様々な情報を取捨選択し、生活や社会で必要な力を見出すため将来設計を見出す力を養うことができた。

(2) 生徒の実態

小学校での学習内容がよく身に付いている。食に関する内容、消費や環境に対する小テストの正答率はほぼ100%で、SDGsの意味についても90%の正答率だった。発表時も「持続可能な社会を担う私たち…」「ニュースで見たのですが…」などという発言もみられる。10月からの食の学習に関しても、毎時間の学習内容がうまく積みあがっていった。また、他の意見を聞いて自分の考えを見つめて深める場面も見られ、学ぶことにとっても素直である。食の学習は消化吸収・調理上の変化などは理科、食材の流通や価格・消費については社会科と関連がある。既習事項についての反応がとても良く、知識が身に付いている様子がうかがえる。しかし、知識の習得が生活を豊かにするためではなく、テストのためという面が振り返りカードを通して感じられる部分もある。

3 研究の目標

- (1) 対話的活動を通して得た気づきを生かして、生活を豊かにする生徒の育成を図る。
- (2) 自分で生活の課題を発見し、知識をもとに解決するための道すじを考えようとする生徒の育成を図る。

4 研究内容

- (1) 研究の目標(1)に関しては意図的に対話的活動を設定する。対話的活動は話合いだけではなく「知識の習得」「実習」「習得」と話合いの柱となる活動を計画的に行う。考えや知識を話合い活動で共有し、考えを広げる。
- (2) 研究の目標(2)に関しては自分の生活を振り返るだけでなく、共通体験を話し合うことによっても、課題を発見できるようにする。他者の考えを知ることにより、考えが広がり多面的に生活を見つめることができる。また、既習事項を確認することによって、自身の知識の確認ができる。知識を活用して、解決に向けて道筋を立てて考えていく。

5 研究の実践

(1) 単元名「持続可能な災害食」

(2) 単元について

災害時の備えは必要と言われているが、きちんと取り組んでいる家庭は少ないと報道されている。大きな災害が来るかもしれないし来ないかもしれない、という状況では備えたから終わり、ではなくコンスタントに備蓄を持続していかなければならない。食の備蓄では農林水産省が提唱するローリングストックという方法を知り、実践することが必要であると考え。食の備蓄なので、そこには栄養バランスやコストについての学習や加工食品についての学習事項も

活用させたい。しかし、従来の家庭の様子を調査して発表し、考える形では深まりがなく、プライバシーの尊重を求められる。そこで実習を通しての気づきを共有することで考え方を広げ、自分事として考える場にした。実習を行うということは共通体験をしていくことで、いろいろな気づきや意見を言いやすい。いわば道德の題材と同じ発想である。

(3) 学習の実際

〈前時の実習〉

災害食の主食「米」に絞ってアルファ米、パックのごはん、米のポリ袋炊飯を行った。ライフラインのガスだけ使える状況でエアコンや照明も消し、水も手洗いを除いて、ペットボトルの保存水を使用した。塩味と栄養バランスを考えて塩付きの海苔を配布した。高野豆腐のみそ汁を作り、広告紙で作ったコップにポリ袋をかぶせて割りばしで食べた。

生徒の感想

・手元が暗くてイライラした。・途中で手が洗えなくて嫌だった。・暖かい汁ものがおいしかった。・水が出なくて困った。

〈本時の学習〉

前時の実習の主食についてジャムボードを用いて、それぞれのメリットや手間に思うところを班ごとに色分けして情報を共有した。それぞれの値段を伝え、保存期限が過ぎたアルファ米も提示した。コストなど様々な面から「我が家ではどのように備える」を考え、発表した。友達の見解を聞いて修正する生徒もいた。また、栄養のバランスをとるために、どんな食材を準備すればよいのかも調べたり考えあったりした。積極的に見本品を見に行ったり、調べたり集中して取り組んでいた。

今日、災害時の主食を考えました。家は人数が多いのと、アルファ米がおいしくなかったので、米にしました。でも、いろいろな状況を考えて少しずつそろえるという意見を聞いて、もう少し考えようと思いました。

【 図 生徒の感想 】

(4) 実践のまとめ

「この授業は生活の課題と実践B衣食住の生活」この項目は、食生活、衣生活、住生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考え、計画を立てて実践できることとある。本校の生徒の実態として、衣食住に恵まれていて課題が見つからない、見つけられないという生徒も多数いる。その中で、授業実践について、指導者から、「実習を通して感じたことや考えたことをもとに、意見を発表しあい考え方の幅を広げること、最後に自分の家庭に戻すことができる面が課題づくりにぴったりだ」というお言葉をいただいた。また、今までの学びを引き出す資料や声掛けを積み重ねることによって、キャリアの4つの④にも結び付いている。

6 研究のまとめ

(1) 成果

授業後の備蓄について家庭での行動を聞いた。

- 家庭の備蓄を見た・・・97%
- 家族で備蓄について話をした・・・41%
- 家族で備蓄の見直しをした・・・47%
- 家族で備蓄の見直しをして整えた・・・8%
- 何もしなかった・・・5%

ほぼ全員が自分の家の状況に関心を持ち、確かめている。備蓄に対して話をしたり、家族で見直しをしている。整えることは費用の面が関わってくるので、5%の家庭が整えるアクションを起こして地域に恵まれていると感じた。

(2) 課題

何もしなかった、という生徒もいた。親が忙しかったという答えだった。家庭での実践は保護者の考えに左右される。だからこそ自分でできる範囲で学びを反映させる手立てを考えていかなければならない。1月1日の能登半島の地震の報道を見て、備蓄だけでは足りないと感じた。そこで非常持ち出し≠備蓄、発災後のフェーズについての学習を追加した。次年度は発災時の行動や非常持ち出しについても踏まえて計画を立てたい。

英語科

1 教科研究主題

自己理解・自己管理能力の向上を図る言語活動の工夫
～互いに高め合う学習活動を通して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

今年度は、英語を通して様々な題材に触れ、バランスよく「4つのみ」を養う活動を行いながらも、みつめる力（自己理解・自己管理能力）に重点を置きたいと考えた。Can-do リストなどの指標を用いて「英語で何ができるようになったか」を理解させ、できるようになったことや自分自身の課題への自己理解を促すとともに、ピア・フィードバック等を通して自分や他者を理解し、認め合う態度も養っていきたいと考え研究を行った。

(2) 生徒の実態

今年度5月に実施した意識調査では、コミュニケーション活動に関して、「自分の意見を理由とともに話すことができる」という項目に、「自信をもってできる」「まあできる」と答えた生徒が5割程度に留まった。聞くこと、読むことの活動を通してインプットした情報に、自分の意見を加えて表現することに苦手意識があることがわかる。

また、本校生徒は知識・技能は高いが、思考・判断・表現を問う問題でつまづきが見られる生徒が多い。コミュニケーションの目的・状況・場面を捉え、その状況に合った表現の選択、活用ができるように支援したい。

3 研究の目標

Can-do リストやルーブリックを活用することで、学習到達度を把握するとともに、次に何に取り組むべきか自己理解をしたうえで、生徒が主体的に学習に取り組む力（みつめる力）を育成する。

4 研究内容

年間を通じて Can-do リストを活用することで「英語で何ができるようになるか」を自己理解させる。また、ルーブリックを活用することで、項目ごとにできていることを確かめ、「良いパフォー

マンスをするためには具体的に何を意識すればよいか」などの、次の目標への見通しをもたせる。

5 研究の実践

<1学年>

(1) Can-do リストを活用した振り返りシート

(2) 取組について

昨年度の実態調査から、みつめる力とみとおす力を育てる必要があると考え、Can-do リストの活用を見直した。今年度は単元ごとに Can-do リストと授業ごとの振り返りシートを Google のスプレッドシートでひとつのファイルとして配付した。

(3) 学習の実際

単元の最初の授業でその単元で身に付けたい力を確認し、黄色で色塗りをした。(図1) 単元終了時には同じシートに赤色でどれくらい力が伸びたのかが可視化できるように色塗りするようにした。

(図2) このことにより、生徒が単元ごとに見通しをもつことができ、定期テストの点数以外でも自身の成長を実感できるようになった。

(4) 実践のまとめ

12月の実態調査では、調査した Can-do リストに関するすべての項目について「自信をもってできる」と回答した生徒の割合が、年度当初に行った実態調査の結果を上回った。12月の実態調査後の生徒のコメントからも、「たくさんのことができようになったと感じた。頑張ってきて良かった。」と前向きな意見が聞かれた。

【図1】

【図2】

< 2 学年 >

(1) 単元名「Program 3 Taste of Culture」

(2) 単元について

みつめる力とみとおす力を育むために、言語活動を通して自分自身のことについて表現する機会を多く設けること、その中で生徒同士が思考ツールやルーブリックを活用して互いに高め合える協同学習を取り入れることが効果的であると考えた。

本単元では、自分自身の将来についてのスピーチする場面を設定し、ルーブリックをもとに作成したブラッシュアップシートを活用し、よりよいスピーチができることを目標に活動を行った。

(3) 学習の実際

生徒にルーブリックを提示し、それぞれの評価項目について ABC の 3 段階のうち、A になるためにはどのようなことに気をつければよいかを考えさせた。それをもとにした「ブラッシュアップシート」を作成し、互いのスピーチを聞いた後に、できている項目や相手へのアドバイスを記入した。(図 3)

【図 3】ブラッシュアップシート

Brush-up Sheet for Interview					
Class ___ No ___ Name _____					
学習課題：高校入試の英語面接で、自分自身の将来について面接官に印象が残りやすい伝え方ができる。					
Examiner 1			Examiner 2		
	内容	留意		内容	留意
A	自分のポイント 3つを述べた	自分のポイント 4つを述べた	A	自分のポイント 3つを述べた	自分のポイント 4つを述べた
B	自分のポイント 2つを述べた	自分のポイント 3つを述べた	B	自分のポイント 2つを述べた	自分のポイント 3つを述べた
C	自分のポイント 1つ以下	自分のポイント 2つ以下	C	自分のポイント 1つ以下	自分のポイント 2つ以下
合格の ポイント	<input type="checkbox"/> 将来やめた こと <input type="checkbox"/> 理由 <input type="checkbox"/> それを実現 するための 準備こと	<input type="checkbox"/> 目標 <input type="checkbox"/> 聞きやすい 言葉 <input type="checkbox"/> 姿勢 <input type="checkbox"/> その他 ()	合格の ポイント	<input type="checkbox"/> 将来やめた こと <input type="checkbox"/> 理由 <input type="checkbox"/> それを実現 するための 準備こと	<input type="checkbox"/> 目標 <input type="checkbox"/> 聞きやすい 言葉 <input type="checkbox"/> 姿勢 <input type="checkbox"/> その他 ()
アドバイス			アドバイス		

ブラッシュアップシートを活用したことによって、生徒同士が積極的にアドバイスをする姿が見られた。

(4) 実践のまとめ

授業を通して、より相手に伝わりやすいよう表現を心がける生徒が増えた。ルーブリックを提示するだけでなく、ブラッシュアップシートに他者と協力して取り組んだことで、より意欲をもってスピーチに臨むことができた。

< 3 学年 >

(1) 帯活動 QAAAQ を用いたペアトーク

(2) 活動について

5 月の実態調査では「自分の意見を理由とともに

に話すことができる」という観点について、約半数の生徒が自信をもつことができないと回答したことに課題を感じた。そこで、ペアで行うやり取りに「QAAAQ」という帯活動を取り入れた。最初の質問(Question)に対し、3文以上で答え(Answer)、更に質問を相手に返すことを1つのサイクルとすることで、英語でのやりとりを2分間続けられることを目標にした。

(3) 学習の実際

活動当初は、内容を広げて理由を伝えられない生徒が多かった。しかし、うまく表現できなかったことを全体で共有することで、色々な伝え方があることを学ぶことができた。

(4) 実践のまとめ

課題となっていた「自分の意見を理由とともに話すことができる」の項目は、肯定的な回答が52.6%から62.2%まで、約10%上昇し、「できない」と答えていた割合も以前より減少した。授業や単元の振り返りでCan-doリストを活用したことによって、達成感をもたせることにも繋がった。

6 研究のまとめ

(1) 成果

単元ごとに焦点化する Can-do リストの項目を整理し、目標に対する振り返りを習慣にすることで、目指す姿に近づこうとする前向きな姿勢が見られ、「みつめる力」(自己理解・自己管理能力)に関する全体値が上がった。

(2) 課題

Can-do リストに関する結果では、即興で行うやりとりでの数値が伸び悩んだ。2 学年以降で行う言語活動では、思考・判断・表現の力が求められ、事前に準備するのではなく、ディベートや即興プレゼンテーションなどでやりとりをする機会が増える。他の技能と組み合わせて行う表現活動での手立てや実践について考えていきたい。

道徳科

1 教科研究主題

自己を見つめ、他人を理解し、将来を見通した道徳的実践力の育成

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

昨年度の道徳科の課題は「道徳的価値を理解できたとしても、道徳的行為の実践までは行きつかない。」というものであった。また全体の研究主題より、「自己の在り方や生き方を主体的に考えさせる」ためには、自分自身がどのような場面でどのような思考をするのか、という理解が必要である。そこで昨年度の課題と全体研究主題を踏まえると、特に「みつめる力、自己理解・自己管理能力」の育成に注力することで、道徳的実践力の向上を促したいと考え、研究主題を設定した。

(2) 生徒の実態

自己理解に努めている生徒は93.5%おり、また他者を理解しようとしている生徒は94.5%に上る。生徒各々が意見を持ち、その意見を通じ自己理解や他者理解しようとする姿勢が見られる。その一方で「積極的に自分の意見を発表する」ことは52.8%と低迷している。

このことから各生徒は自身の意見をもっているものの、自ら進んで自己表現がしづらい生徒が多いという実態が窺える。そこで生徒自身の意見が発露できる場面を多く設けることで、発言することへの抵抗感を減らしていきたいと考える。

3 研究の目標

(1) 生徒の実態に応じた様々な表現活動の場を設定することで、生徒個々の意見を表出させる機会を促す。また自身の考えを深め、他者と相互に意見を交わす中で多面的・多角的に思考を深める道徳性を養うことを実践の中で明らかにする。

(2) 道徳的価値を偏りなく指導することで、自身の今までの思考と照らし、様々な道徳的行為が実現できることを明らかにする。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

自己理解、他者理解の為にも生徒個々の考えを整理し、まとめる必要がある。その上で意見を伝えやすい実践の工夫を単元ごとに行い、相互交流を行う中で道徳性が高まると考える。

(2) 研究の目標(2)に関して

道徳的価値四項目が偏らぬよう、かつ学年職員がローテーション道徳を行い、各生徒の多面的・多角的な道徳的思考を養う。また生徒個々の振り返りを行う際に、授業前と授業後の思考の変容を意識させることで、道徳的価値について考えが深まるようにする。

5 研究の実践

(1) 教材名『『自分』って何だろう』

(2) 教材について

本教材は道徳の内容項目のうち「A 主として自分自身に関すること」の道徳的視点に立った教材である。自分自身についてふと疑問に思うことや「これでよいのだろうか」と自問することについて、短い言葉や漫画で考えを表現した中学2年生の内容である。人は誰しも他者から認められたい、褒められたいという欲求をもっている。その一方で他者と比較して劣等感に思い悩むことや、他者との違いから不安を感じることもある。他者との違いを恐れているはずなのに、他方で人より抜きん出たい、人に認められたいという相反する気持ちももち合わせている。結局は人と比較してしまうことで、自身の良さを埋没させていることに気が付いていないのである。そこでこの単元を通して、他人からどう見られるのかを気にして、自分の良さを大

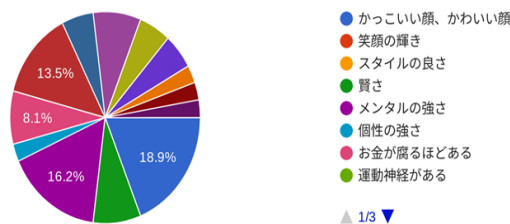
切にできない弱さがあることに気付かせたい。

「ありのままの自分」「かけがえのない自分」が大切だと再確認し、多面的・多角的に自分自身を見つめ直すことのできる教材である。

(3) 学習の実際

事前アンケートで「何があれば自信をもって人生を過ごせると思うか。」という内容について自由回答を行い、その結果を示した。(資料1)

あなたは、何があれば自信をもって人生を過ごせると思うか。
37件の回答



【資料1】事前アンケート結果

そこから教材の3つの4コマ漫画を読み、3つの発問の「外にあるもので自信がつくと思っていた。」「自分の中に自信があった。」「自分に自信をもつとは、どういうことか。」について、生徒個々に考えてもらった。また3つ目の発問を考えやすくするため、自分自身の自信がないところを、リフレーミング一覧を渡し、言い換えてもらった。

最後にまとめとして「自分の良さを認めた上での充実した生活はどのようなものか」考えたのち、振り返らせた。

(4) 実践のまとめ

「何があれば自信をもって人生を過ごせると思うか。」という発問に対し、教材内の4コマの主人公と生徒らが同様の意見を持ち、共感する立場に視点を定め考えることができた。【資料1】のように、自分自身の中の価値ではなく、他者からの評価だけで自身の価値が決まると思い込んでいる生徒が多いことが分かった。発問を通し、また自信のない部分をリフレーミングすることにより、自信をもつことは「自分自身が自分の価値・能力を信じること。」だと改めて考えられるようになった。

6 研究のまとめ

(1) 成果

今回の研究では「自身の意見を整理し、思考の変容を意識し、相互交流を行うことで道徳性が養われる」と考え、実践を行った。

「自身の意見を整理し、意見を発表する」ことについて「自分の意見を積極的に発表する方だ。」という意識調査を行った。5月の時点では「積極的に発表しない」と答えた生徒が12%いたのに対し、1月の時点では6%と推移した。

また「授業前後の意識の変容」については授業の導入と自分自身の意見を明らかにし、授業後振り返りの際に自分の意見が変化した点について意識し記述するよう、表現方法を工夫した。その結果「授業を通して自分を見つめ、理解しようとしている」と答えた生徒は、年間を通して9割程おり「授業を通し、意識の変容を考える」ことが、定着している生徒が多いことが分かった。

(2) 課題

今回の意識調査では「授業での気づきを、これからの生活に生かしていこうと思っている」と答えた生徒は年間を通し、9割程いた。しかし、道徳的実践力が身に付いたか確認するには、至らなかった。授業後どのような行動をとったのか、その際に考えた道徳的価値は何だったのか、改めて振り返る必要がある。知識を獲得し、思考するだけに留まるのではなく、行動できるようになったときに初めて道徳性が身に付いたと言える。次年度では道徳的実践をどの場面で行ったか、毎回の授業で確認することで意識付けを図っていく必要があると考える。

特別活動

1 教科研究主題

主体的に社会における自己の在り方を考えられる生徒の育成

～「自己理解・自己管理能力」と「課題対応能力」の向上を目指して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

日々目まぐるしく変化する社会の中で、生徒には、自己の在り方を考え、新しい未知の課題に試行錯誤しながら対応する力が求められる。そのような今日の社会や教育的課題を踏まえ、本校では学校教育における望ましい集団活動や体験的な活動を通して、実際の社会で生きて働く社会性を身に付け、生徒の人間関係形成能力の育成を図るための実践を行ってきた。学級活動・生徒会活動・学校行事では、学んだことを人生や社会での在り方と結び付けて深く理解したり、これからの時代に求められる資質・能力を意識させたりするなど、生涯にわたって自ら学び続け、現代社会を「生き抜く」生徒の育成を図っている。

本校の特別活動では、生徒自身が自己の在り方を見つめる「自己理解・自己管理能力」と、どこに課題があるかを見い出し、解決しようとする「課題対応能力」に重点を置いた。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は、学校行事・生徒会活動共に活発に取り組んでいる。昨年度末の意識調査では、「日々の生活は、みんなの支え合いで成り立っていることを理解し感謝することができているか」に対して、64.1%が「とてもそう思う」と回答した。学級への所属感や有用感を実感し、友人と協力しながら主体的に活動しようとする意識が高いことがわかった。しかし、「今までの経験をもとに、新たな課題に直面したとき、どのような行動ができるかを考え選択しようとしているか」に対して強く肯定した生徒は4割弱に留まったため、課題発見能力や課題対応能力の育成が課題である。

3 研究の目標

- (1) 日頃の活動を通して、自己の良さや課題を見出す取組を行い、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を鍛え、資質・能力の育成を図る。
- (2) 学校行事において、事前と事後の意識の変容や、他者との関わりがもてるようなポートフォリオの工夫を行う。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

振り返りを通して自己について考えを深め、他者と関わり合い、互いの良さや課題を発見し合う活動を通して、自己理解や自己管理能力、課題対応能力の向上を目指した。

(2) 研究の目標(2)に関して

体育祭や合唱コンクールなど、様々な学校行事のポートフォリオに、「見通し」と「振り返り」を記入する欄と、活躍した友人を書く欄や友人からコメントをもらう欄を作成した。

5 研究の実践

(1) 単元名「ito～価値観のズレを楽しもう～」

(2) 単元について

人によって価値観はそれぞれである。その価値観の違いが受け入れられなければ諍いやケンカに発展することもある。多様な価値観にあふれる現代社会を生き抜くには、自分の価値観を持ちつつも、人の価値観を受け入れることが重要である。

この単元では、カードゲーム「ito」を使って互いの価値観の相違に気づき、それを認め合うこと

で、4月に始まったばかりの新学級でのより良い人間関係の形成ができるように実施した。



(3) 学習の実際

最初の活動では、生徒に1～100の数字が書かれたカードから1枚配付し、「お土産にもらったら嬉しいもの」「人気の給食メニュー」などのテーマに基づいて、生徒に自分のカードに書かれた数字にふさわしいものを決めさせた（数字が高いほどそのテーマに当てはまるもの）。生徒は数字を言わず「揚げパン」などの自分が決めたものと言って、2人合わせて数字が100に近づく相手を探していく。教室を自由に歩き回り、友人の決めたものを聞いて、頭を悩ませる生徒が多かった。

次の活動は班の中でテーマに対して、数字が小さいであろうものから順に並べていく活動を行った。教室内のあちこちで、「こっちの方が数字が大きい」と根拠を示しながら議論する様子が見られた。数字を発表する場面になると、納得の声や驚く声などが上がり、おおいに盛り上がっていた。



(4) 実践のまとめ

最初の活動によって、生徒は自分にとって相手の提示したものがどれぐらいの数字になるかを考えることになる。自らの価値観に基づいて判断す

ることになるので、自分を見つめなおす機会になる。次の活動では、それぞれが提示したものが、自分にとってはどの程度の価値のものなのかを考えるだけではなく、班員の意見を聞くことで、自分の価値観との違いに気付くことになる。最終的に班としての考えを統一することになるので、自分の価値観と異なる考えであっても受け入れる必要が出てくる。自分を見つめなおし、互いに認め合う良い実践となった。

6 研究のまとめ

(1) 成果

5月に行った意識調査と、1月に行った意識調査を比較すると、全学年ともに、ほぼすべての調査項目で肯定的回答が増えた。中でも、「友達の気持ちを考えて発言や行動し、より良い人間関係を築こうとしているか」の項目の肯定的回答が全体で5%増えていた。実践の中で他者との関わりを取り入れた活動を行ってきたこと、ポートフォリオで友人のいいところを見つけたり、友人にコメントしたりする活動を続けてきたことなどが理由として考えられる。

(2) 課題

1月に行った意識調査のうち、「自分で決めたことを実践し、それを振り返り、次の活動に活かそうとしているか」「自分を見つめ、自分の良いところを伸ばそうと努力しているか」「自分の生活上の課題や改善点を、自ら進んで努力し、解決しようとしているか」の3つの項目で、強く肯定する回答が3割程度となった。3つに共通しているのは自己理解・自己管理能力である。昨年度・今年度の研究を通じて、友人を思いやり、協力して物事に取り組む態度の育成ができてきたので、来年度以降は自己肯定感を高めるような実践を行っていく必要がある。

総合的な学習の時間

1 教科研究主題

自己の生き方を考えていくための探求的な学習活動の工夫 ～課題解決能力の向上を目指して～

2 主題について

(1) 全体研究主題との関連から

総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習としての性格をもち、探究的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしく、そこで育成される資質・能力が、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような、教育的に価値のある諸課題であるべきとされている。そこで、職業や自己の将来に関する課題を中心として学習に取り組み、各学年を以下のとおりに位置づけた。

1年生…【視野を広げ、「学び方」の基礎を身に付ける段階】

職業を知る

2年生…【協働的に学習に取り組む中で、追及の仕方を学ぶ段階】

働くことの意義を学ぶ

3年生…【培った力を生かしながら、個人テーマを追求する段階】

将来の私を考える

(2) 生徒の実態

昨年度に行ったアンケートのなかで、「職業学習のなかで、新たな課題を考えまとめることができましたか」という質問に対し、肯定的な回答をした生徒は31%であった。また、「自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えているか」という質問に対しては、肯定的な回答をした生徒が他の質問と比べて10%ほど低かった。

これらの結果から、体験的な学習で得た学びや視点を、自分自身に活かせるようにしたいと考えた。自己実現に向けての課題を自ら発見・解決できるよう、思考力・判断力・表現力を伸ばす中で、将来への見通しと手段を考えられるようにしたい。

3 研究の目標

(1) 体験的な学習を行う中で、思考力・判断力・表現力を伸ばすために新たな気付きや課題を発見させそのことをまとめさせる。

(2) 学習の中で見通しをもたせるために既習の内容を用いて未知の問題に取り組みさせる。

4 研究内容

(1) 研究の目標(1)に関して

体験的な学習を行う中で、思考力・判断力・表現力を伸ばすためには、新たな気付きや課題を発見しそのことをまとめることが必要である。体験的な学習を行う中で、自分で調べたこと以外に気付くことやわかることがたくさんあると考え、そこから新たな課題を考えまとめることが思考力・判断力・表現力を伸ばすことにつながる。

(2) 研究の目標(2)に関して

学習の中で見通しをもたせるためには2つの過程が必要である。

1つ目は、学習の流れを伝えることである。学習していく中でどのような内容を学び、最終的にどのような力を身に付けるのか学習の始めにわかることで、見通しをもって学習に取り組める。

2つ目は、既習の内容を用いて未知の問題に取り組むことである。探究的な学習を進めていく上で、新たな課題を自分で設定したとき、その課題を解決するためにどのような方法や手段があるかを考えるために見通しをもつことが必要である。そのために、既習の内容を用いて見通しをもつことが大切である。

5 研究の実践

(1) 単元名「職業学習」

(2) 単元について

職業学習は、①職業について調べる ②企業の方によるワークショップ・講演 ③レポート作成という3段階で行った。

第一段階では職業について、主にインターネットを用いて調べ学習を行う。生徒が興味を持っていたものや、適性診断を用いて出てきた職業について調べることで、学習内容が将来の自分にも関わるという意識を持たせることをねらいとした。

第二段階では、実社会で働く企業の方を招き、「働くこと」の意義や実際、その職業につくための手段をワークショップ形式（1 学年はパネルディスカッション形式）で直に学んだ。

第三段階では、「働くとはどういうことか（なぜ人は働くか）」「働く上で大切なことは何か」というテーマでまとめを作る。第一段階で用いたプリントを継続利用したり、第二段階での学習を通して得た気づきをまとめる設問を設けたりすることで、単元の活動全体を踏まえたまとめが作れるようにした。

(3) 学習の実際

第一段階では、自身が興味を持つもの、適性があると紹介された職業を調べたため、自分事として取り組む生徒が多く、活発な姿がよく見られた。

企業の方から直に教わる第二段階では、ネットや書籍では伝わりづらい社会人からの生の情報・思いに生徒が触れることができた。授業の後半に生徒から質問を行う時間を設けたことで、自身の将来の目標を達成するために何を行うべきか、また事前学習で得た疑問などに対する気づきを得られる場面もあった。



【資料1】企業による講演の様子

これらの学習を踏まえ、第三段階では「働くこと」についてのまとめを行った。作成されたレポートを見てみると、事前学習の段階では働くことに対し、「やりがいを得られそう」「お金を得られる行動」といった抽象的なイメージを回答する生徒が多かった。それが企業の方との交流を経たことで、働くことで得られるやりがいや成長を具体的に述べる回答が増えた。また、将来の自分と結び付け、これからの生活面や学習面で達成したい目標を設定する旨の回答も見られた。

(4) 実践のまとめ

自身の興味や適性に沿った調べ学習から始め、実社会で働く人の生活や思いに触れつつ、「働くこと」に対する自分の考えをレポートにまとめた。自身の将来に結び付け、これからの目標を新たに設定する回答も多々見られたが、中には学習で得た知識の記述に留まる回答も見受けられた。

6 研究のまとめ

(1) 成果

課題となっていた「職業学習のなかで、新たな課題を考えまとめることができましたか」という質問に対し、肯定的な回答が昨年度の31%から、83%へと有意に増加した。事前学習の段階から、自身の興味や適性を加味したことで、単元を通して学習を自分事として生徒に捉えさせることができたと考える。

(2) 課題

これらの学習が、将来の自己実現に対する努力や、生活・学習面の工夫に繋がったかという質問に対しても、肯定的な回答が昨年度から8%ほど増加した。しかし、その内訳をみると、「当てはまる」が31.6%、「まあ当てはまる」が52.6%と、消極的な肯定が多い。引き続き、学習を経て自己の課題を設定できるような活動を設けるとともに、その課題の解決法を考えられる所まで発展できるように工夫したい。

お わ り に

教 頭 岩 脇 之 俊

本校では、令和2年度、3年度と、千葉市教育委員会の指定を受けてキャリア教育について研究を行ってきましたが、今年度もその取組を継承し、引き続きキャリア教育について研究を深めることにしました。今年度の研究の特徴として、第一に、学校行事に関して、特別活動や総合的な学習の時間の取組を基に、ポートフォリオを作成し、それをキャリアパスポートとして蓄積したことです。行事ごとに事前と事後の取組に対しての意識の変容を見とるための題材としました。

第二の特徴として、生徒にキャリア教育の目標を示すために、「基礎的・汎用的能力」を「4つの④」でわかりやすく表現し、それを各教科、領域で実践したことです。人間関係形成・社会形成能力は、「④とめあう力」と捉え、他者と協力して学習に取り組む協働的な学びの中で育成することとしました。自己理解・自己管理能力は、「④つめる力」と捉え、自分の思いや考えを形成し深めるように学習過程を工夫しました。課題対応能力は「④いだす力」と捉え、各教科の見方・考え方を働かせる中で、見通しをもって事象を整理・分析・処理する中で育成しました。キャリアプランニング能力は、「④とおす力」と捉え、様々な題材に触れる中で、適切に自分の意見や感想を書く活動を重視しました。

各教科の身に付けさせたい基礎的・汎用的能力として、課題対応能力は「④いだす力」に重点を入れた教科等が多くありましたが、他の2つの能力「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」の向上も見られました。しかし、「キャリアプランニング能力」については、他の能力と比べ、十分な伸びが確認できず課題となり、引き続き学校全体で意識して取り組んでいく必要があると考えております。

結びに本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいた先生方、並びに地域、保護者、関係各位の方々に感謝を申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。